

プロタゴラス——あるソフィストとの対話

* 本PDFは『プロタゴラス—あるソフィストとの対話』

(2010年、光文社刊。本体686円＋税)の本編のサンプル版です。

株式会社光文社の許可なく本ファイルを販売・改変することは著作権法違反となります。また、本ファイルのコピー・転載はご遠慮ください。

* 本編とは一部ページ順が異なります。

光文社 古典新訳 文庫

プロタゴラス——あるソフィストとの対話

プラトン

中澤務訳



光文社

紀元前5世紀頃のギリシャ





Title : ΠΡΩΤΑΓΟΡΑΣ

B.C. 4c

Author : ΠΛΑΤΩΝ

凡例

- (1) テキストは、Oxford Classical Texts 『プラトン全集第三巻』所収のバーネット (J. Burnet) による校訂テキストを使用しています。
- (2) 訳者の判断で、全体をプロローグ、第一～七章、エピローグに分け、各章に表題を付しました。また、話の切れ目には「＊」を挿入しています。
- (3) 原文中の補足的発言は () で括りました。また、原文にはない補足的な説明を「」で適宜挿入しました。
- (4) ギリシャ語のカタカナ表記は、できるだけ一般的なものを採用しています。そのため、必ずしも統一した規則に従っているわけではありません。
- (5) 訳文の下部にある数字とアルファベットは、十六世紀に刊行されたプラトン全集に由来する参照記号で、参照箇所を指定するためのものです。本訳でも、参照箇所は、本書の該当ページと、この参照記号で指定します。

目次

訳者まえがき

プロタゴラス——あるソフィストとの対話

解説

中澤務

年譜

訳者あとがき

9

13

204

232

238

訳者まえがき

『プロタゴラス』は、古代ギリシャの都市国家アテネを舞台に、アテネの哲学者ソクラテスと、ソフィストの大物プロタゴラスとの間に繰り広げられる、徳^{アレテー}をめぐる対話の様子を描いた物語である。物語を始めるまえに、その背景を少しだけお話ししておくことにしよう。

紀元前五世紀、古代ギリシャ世界は、隣国ペルシア帝国との戦争（ペルシア戦争）にみごと勝利をおさめ、大きな発展を遂げていた。なかでもアテネは、ギリシャ諸国の中心として活躍し、その勝利に貢献したことから、ギリシャ世界の盟主の地位を手に入れた。そして、天才政治家ペリクレスの指導のもとで国力が充実し、軍事的にも、経済的にも、文化的にも最盛期を迎えるにいたる。歴史のなかでアテネがもつとも輝いていた時代である。

そんなアテネには、ギリシャ各地から進歩的知識人たちが集まり、アテネ人たちに對して啓蒙活動を行ない、進歩的な教育を施していた。ソフィストたちである。ソフィストというと、詭弁家（道理に合わない、こじつけの議論をする者）のイメージが強い。しかし、そうした悪しきイメージは、彼らの活動の一面に由来するものにすぎない。多くのソフィストは真面目に啓蒙教育活動を行ない、アテネ人たちの知的要求に応えていたのである。ソフィストたちは、時代をリードする思想界の花形であった。そんなソフィストたちに、アテネ人たちは何を求めたのだろうか？ アテネ人たちの関心は、人間が持つべき優れた能力を手に入れることに向けられていた。ギリシャ人たちは、そうした能力を人間の「徳」^{アレテ}と呼んでいた。徳とは、たんに現代の日本語でイメージされがちな道徳的高尚さ（人徳）を意味するだけではない。それは元来、ものが持つ固有の優れた性質を意味し、たとえば馬なら速く走る能力、ナイフならするどい切れ味というふうに、人間以外のものもそれぞれの徳^{アレテ}を持っている。人間の徳も、たんに道徳的な性格だけでなく、勇敢さや優れた知力など、さまざまな能力を含み込むものであった。

では、どうしてアテネ人たちはそのような人間の徳^{アレテ}に関心を持ち、手に入れよう

としたのだろうか？　じつは、当時のアテネには、^{アレテー}徳を求める切実な理由が存在していた。当時のアテネは、国民が国の政策決定に直接かわることのできる直接民主制を採用していた。この政治制度のもとでは、^{アレテー}徳を持つ優れた人物が政治家として成功し、社会を動かすことができたのである。^{アレテー}徳の獲得が社会的成功に直結していたわけだ。だからソフィストたちは、人間の^{アレテー}徳として、なによりも弁論や演説の能力、すなわち言葉を使って人々を動かす力を教育しようとした。彼らは言葉を操るさまざまな技術を開発し、そうした技術を教えることで、アテネの知識階級の支持を得ていたのである。

この物語の主人公ソクラテスは、そうしたソフィストたちの活動に疑問を抱いている。はたして人間の^{アレテー}徳というものは、そんなに簡単に教えられるものなのだろうか？　そして、その教師を標榜するソフィストとは、そもそも何者か？——ソクラテスは、プロタゴラスに心酔する青年ヒポクラテスとともに、アテネを訪問中のプロタゴラスのもとにおもむき、^{アレテー}徳をめぐる対話をはじめ。しかし、対話は二転三転。次第に哲学的色彩を強めながら、やがて意外な結末を迎えることになる。

当時ソクラテスは三十六歳ころ。まだ若くて血氣盛んな年齢である。対するプロタゴラスは、すでに六十歳近い。ソフィストとしての長年の活躍により、ギリシヤ中にその名声をとどろかせている。この百戦錬磨の老獠ろうかいなソフィストを相手に、ソクラテスがどんな食い下がりを見せるのか——これがこの作品の見所といえるだろう。

それでは、物語的面白さと哲学的面白さを兼ねそなえた、プラトン対話篇の秀作をお楽しみください。

プロタゴラス——あるソフィストとの対話

主要登場人物

ソクラテス

アテネの哲学者で、この物語の語り手。さまざまな人々と徳^{アレテー}をめぐる対話をしている。三十六歳くらい。

プロタゴラス

ソフィストの重鎮。アプデラ出身で、年齢は六十歳に近い。ソフィストとしての長年の活躍で、ギリシャ中に名声がとどろいている。

ヒッピアス

エリス出身の博覧強記のソフィスト。ソクラテスと同世代。

プロディコス

ケオス島イウリス出身のソフィストで、言葉の分析にたける。

ソクラテスと同世代。

ヒポクラテス

プロタゴラスへの弟子入りを切望するアテネの青年。裕福なア

ポロドロス家の息子。

カリアス

アテネの大富豪の息子で、ソフィストたちの熱烈な庇護者。二

十代半ば。

アルキビアデス

十七歳くらいの美青年。ソクラテスをはじめ多くの崇拜者を集

めている。

プロローグ

「アテネの街角で、ソクラテスが友人たちに出会う。」

友人 おや、ソクラテス、どこに行っていたのだ？ 答えは明白かな？ 若き美青年

アルキビアデスのあとを追いかけてまわしていた。そうだろう？ まあ、たしかに彼

はあいかわらずの美男子だねえ。つい最近も彼を見かけてそう思ったよ。だがねソクラテス、ここだけの話にしてほしいんだが、彼はすでに立派な男子じゃないか。

じつさい、ひげだっけずいぶん濃くなっているしね。

ソクラテス それがどうした？ きみはホメロスを賞賛しないつもりかい？ 彼は

「青春時代でいちばん美しいのは、ひげが生えはじめる頃」と言っているではな

いか³。アルキビアデスは、いままさにそんな年頃なのだよ。

友人 それはそうと、いまはどうなんだい？ さっきまで、彼といっしょにいたんだらう？ あの青年は、きみに対してどんな態度をとっているのかな？

ソクラテス いいと思ったね。とりわけ今日はそうだったよ。だって、彼はぼくのために多くの発言をして、ぼくを助けてくれたのだから⁴。そう、たしかにぼくは、い

1 アテネの政治家として波乱に満ちた生涯を送った人物だが、ここではまだ十七歳くらいの青年。たいへんな美貌の持ち主で、ソクラテスをはじめ多くの崇拜者を集めた。

2 古代ギリシャには、「バイデラスティア」と呼ばれる独特の性風習があった。これは、成人男性が、「立派な男子」に成長するまえの少年と恋愛関係を結ぶもので、通常は、少年が成人する（ひげが濃くなる）とその対象ではなくなった。この評価は美青年を自負するアルキビアデスを傷つけることになるため、友人はここだけの話にしてほしいと言っている。

3 ホメロスは、古代ギリシャの伝説的詩人であり、二大叙事詩『イリアス』と『オデュッセイア』の作者。当時の教養の源泉であり、会話の端々で引用される。ここでの引用は、『イリアス』第二四卷三四八行、および『オデュッセイア』第一〇卷二七九行からのもの。

4 アルキビアデスは、その後の対話で二回（110-111頁、336B-Dと151頁、348B）、ソクラテスを助ける発言をしている。

ままで彼と一緒にだったのさ。

でも、ちょっと奇妙なことがあったので、きみに話してあげよう。たしかに、彼はぼくのそばにいた。ところが、ぼくの心は彼には向かわなかった。それだけじゃない。ぼくは幾度となく、彼がいることすらすっかり忘れてしまったのだ。

友人 どうしてそんなことが、きみとあの青年との間に起こったのだろうか？ だって、きみが他のもつと美しい人に出会ったはずはないもの。すくなくとも、この「アテネの」国の中では。

ソクラテス それが出会ったんだよ。はるかに美しい人に。

友人 なんだって？ それはこのアテネの人かい？ それとも異国の人かい？

ソクラテス 異国の人だ。

友人 どこの国の人だろう？

ソクラテス アブデラの人だよ。

友人 きみは、その異国の人をそんなに美しいと思ったのか？ あのクレイニアスの

息子「アルキビアデス」よりも美しくみえるほどに？

ソクラテス おめでたい人だねえ。最も賢いものが、より美しくみえるのは当然のこ

とだよ。

友人　ほう。ソクラテス、するときみは、ここに来るまえに、誰か賢い人に会っていったと……？

ソクラテス　いやいや、思うに、この時代最高の賢者にさ。もつとも、きみが認めてくれればの話だがね——最高の賢者とは、プロタゴラスだと。

友人　えっ、なんだって？　プロタゴラスがこの国に来ているのか？

ソクラテス　すでに三日目になるよ。

友人　するときみは、いまここに来るまで、彼と一緒にいたわけか？

ソクラテス　そうだ。いろいろなことを話したり聞いたたりした。

友人　それでは、もしきみに何か用事がないなら、そのときの会合の様子をわれわれに話してくれないか？　さあ、この「ぼくの従者の」召使を立たせて、きみがここ

5　ここで「国」と訳したのは、ポリスと呼ばれる都市国家のこと。古代ギリシャ世界には多くのポリスが存在し、ギリシャ人は各ポリスの国民として生活していた。

6　アブデラは、ギリシャ北部のトラキア地方のポリスで、たくさんの知識人を輩出した。

にすわるんだ。

ソクラテス　ぜひ、そうさせてもらおう。きみたちが話を聞いてくれるなら、感謝するよ。

友人　われわれだつてきみに感謝する。きみが話をしてくれるなら。

ソクラテス　じゃあ、感謝倍増だな。それでは聞いてくれ。

第一章 ヒポクラテスとの対話

昨夜のことだ。まだ夜明け前だというのに、アポロドロスの息子でパソンの弟のヒポクラテス⁷が、杖でぼくの家の扉をとてもはげしく叩いた。誰か家の者が扉を開けてやると、彼はすぐさまなかに駆け込んできて、大声で言った。

「ソクラテス、起きていますか？ それとも、眠っているんですか？」

彼の声だとわかったので、ぼくは言った。

「ヒポクラテスだな、そこにいるのは。まさか、何か悪い知らせではあるまいね？」
「とんでもない。いい知らせなんです」と彼は言った。

7 アテネの裕福な家の息子であるが、父と兄も含め、詳しいことは知られていない。

ぼくは言った。「それならいいんだがね。だが、どんな知らせだい？ それに、こんな早くにやってきた理由は？」

彼はぼくのそばに立ち、言った。

「プロタゴラスが来たんですよ」

ぼくは言った。「彼が来たのは、おとといだが……。きみは、さつき耳にしたばかりのようだね？」

「ええ、じつをいうと、ゆうべ、はじめて耳にしました」

そう言いながら、彼はベッドを手で探り、ぼくの足もとに腰かけた。そして次のように言った。

「そう、ゆうべなんです。それもずいぶん遅く、オイノエ区⁸から戻ったあとにです。じつは、あの召使のサテュロスのやつが、ぼくのところから逃げ出してしまったんです。もちろん、やつのおとを追いかけることは、あなたにも言っておくつもりでした。でも、別の用事に気をとられて、忘れてしまったんです。それで、家に帰ってきて夕食をすませ、寝ようとしたんですが、そのとき兄貴がぼくに言ったんです。プロタゴラスが来たぞってね。ぼくはすぐに、あなたのもとに飛んできようと思いましたよ。でも、

もうずいぶん夜も遅いことに気づきましてね。それでひと眠りしたんですが、疲れがとれたものですから、すぐに起きて、こうしてここにやって来たんです」

ぼくには、彼が勇みたち、興奮しているのがわかった。そこでこう言った。

「そんなことが、きみにとって何だというのか？ プロタゴラスがきみに、何か悪いことをしたわけではあるまい？」

すると、彼は笑って、言った。

「ところがなんと、したんです、ソクラテス。だって、あの人は自分だけが賢者でいて、ぼくを賢者にしてくれないんですもの」

ぼくは言った。「いや、そんなことはないよ。あの人にお金を払ってお願いすれば、きみも賢者にしてくれるだろうさ」

彼は言った。「ああ、神さま、それで話がすむならどんなにいいだろう！ ぼくの

8 アテネの区（デモス）の一つで、アテネ北西の国境沿いにあったものを指すと思われる。中
心市からは三〇キロメートルほどの距離があった。

9 サテュロスはオイノエ区経由で国外逃亡を企てたものと思われる。

お金を全部つぎ込んでもかまわない。友だちのお金だつてつぎ込みますよ。じつは、ぼくがいまあなたのところにやって来たのも、そのためなんです。ぼくのために、あの人と話し合つてほしいんですよ。なにしろ、ぼくはまだ若造のうえに、これまでプロタゴラスを見たこともないし、話を聞いたこともありません。まえに彼が来たときには、ぼくはまだ子どもでしたから。でもねソクラテス、誰もがあの人のことをほめたたえ、弁舌に秀でた最高の賢者だと言っていますよ。

さあ、すぐに彼のところに行きましょう。そうすれば、家にいるところをつかまえられる。ぼくが聞いたところでは、彼は、ヒポニコスの息子のカリ阿斯¹⁰のところ泊まっているそうです。さあ、出かけましょう」

そこで、ぼくは言った。

「まあまあ、いますぐあそこに行くのは、やめておこうよ。まだ早いから。それより起きて、ここで、中庭¹¹に出てぶらぶら歩きながら、明るくなるまで時をすごそう。出かけるのはそれからいい。プロタゴラスは、たいていは家の中にいるんだよ。だから心配ご無用だ。きっと、家にいるところをつかまえられるから」

*

そのあと、ぼくたちは起き上がり、中庭に出てぶらぶらと歩いていた。ぼくはヒポクラテスの決意の固さを試したかった。そこで、彼を調べるために次のように問いかけた。ぼくは言った。「ぼくに答えてほしい、ヒポクラテス。きみはいま、プロタゴラスのもとに行こうとしている。そして、きみ自身のために、彼に報酬のお金を払うつもりでいる。でも、きみは、そもそも何者のもとを訪ねるつもりでいるのかな？　そして、きみは何者になるつもりなのだろう？」

たとえば、アスクレピオス派に属する医者で、コス島のヒポクラテス¹²という、きみと同名の人物がいる。きみがその人物のもとに行き、きみ自身のために、彼に報酬の

10 アテネの大富豪の息子で、ソフィストたちのパトロン。父から莫大な遺産を引き継ぐが、豪

奢な生活や事業の失敗などで失った。本作ではまだ若く、おそらく二十代なころである。

11 古代ギリシャの家屋は中庭を持ち、それを取り囲むように部屋が配置されていた。

12 エーゲ海のコス島で生まれ活動した著名な医者で、ソクラテスの同時代人。アスクレピオス派とは、医神アスクレピオスを信仰していた医学派のこと。

お金を払うつもりでいたとしよう。そのとき誰かが、きみにこう尋ねたとする。『ばくに答えてほしい、ヒポクラテス。きみはヒポクラテスに報酬を払うつもりでいる。

でも、きみは何者に払うつもりなのか?』さて、きみは何と答えるだろうか?」

「『医者に払うつもりだ』と答えるでしょう」と彼は言った。

「『きみは何者になるつもりなのか?』と尋ねたら?」

「『医者になるつもりだ』と答えるでしょう」と彼は言った。

「それでは、きみがアルゴス人のポリュクレイトスか、あるいはアテネ人のペイディアス¹³のもとに行き、きみ自身のために、彼らに報酬を払うつもりでいたとしよう。そのとき、誰かがきみにこう尋ねたとする。『きみはこのお金をポリュクレイトスやペイディアスに払うつもりでいる。でも、きみは何者に払うと考えているのか?』さて、きみは何と答えるだろうか?」

「『彫刻家に払うと考えている』と答えるでしょう」

「『では、きみ自身は何者になるつもりなのか?』と尋ねたら?」

「もちろん、『彫刻家になるつもりだ』と答えるでしょう」

ぼくは言った。「それでは、次の場合はどうだろう。ぼくときみが、いまプロタゴ

ラスのもとに行き、きみのために、彼に報酬のお金を払おうとしている。もちろん、われわれのお金で足りて、彼にお願いを聞いてもらえるならの話だよ。もし足りなかったら、さらに友だちのお金までつぎ込むことになるだろうねえ。

さて、ぼくたちがこうしたこと、そんなにも熱心になっているのをみて、誰かがぼくたちに、こう尋ねたでしょう。『ぼくに答えてほしい、ソクラテスにヒポクラテス。きみたちは、プロタゴラスにお金を払うつもりでいる。でも、きみたちは何者に払うと考えているのか?』ぼくたちは、この人に何と答えたらよいだろうか?

ぼくたちの聞くところでは、プロタゴラスは、自分の名前以外にどんな名で呼ばれているだろうか? たとえば、ペイディアスは〈彫刻家〉という名で呼ばれ、ホメロスは〈詩人〉という名で呼ばれている。では、プロタゴラスについては、そのような名として、ぼくたちはどんな名を聞くだろうか?

「世間の人たちは、たしかにあの人のことを〈ソフィスト¹⁴〉という名で呼んでいま

13 いずれも、紀元前五世紀に活躍した著名な彫刻家。

14 当時活躍していた、教育を職業とする進歩的知識人たちのこと。詳しくは、「訳者まえがき」と「解説」を参照。

す、ソクラテス」と彼は言った。

「そうすると、ぼくたちはソフィストにお金を払いに行こうとしていることになるね」

「そうなります」

「それでは、もし誰かがさらに、きみに次のように尋ねたとしたらどうだろう？

『それで、きみ自身は、何者になるつもりでプロタゴラスのところに行くのか？』とすると、彼は顔を赤くして——すでに明るくなりはじめていたから、彼の姿がはっきり見えたのだ——こう言った。

「もし、いままでの例と同様だとしたら、明らかに、ぼくはソフィストになるつもりだということになります……」

ぼくは言った。「だがね、正直な話、きみは、自分が世間の人たちからソフィストと見なされることを、恥ずかしく思うのではないだろうか？」

「じつはそうなんです、ソクラテス。もし、本心を言わねばならないとしたら……」¹⁵

「ということは、ヒポクラテス、もしかしたらきみは、自分がプロタゴラスから学ぶことを、そうした類のことだとは思っていないのかもしれないね。そうではなくて、

むしろ、きみが読み書きの先生や、音楽の先生や、体育の先生から学んできたような類のことだと思っているのではないだろうか？ というのも、きみはこれらの科目を、プロになる気で専門的に学んだわけではない。むしろ、素人たる自由人が学ぶにふさわしいがゆえに、教養として学んだのだから¹⁶」

「なるほど、そうですね。プロタゴラスから学べるのは、むしろそのような類のことなんだと思います」と彼は言った。

「ところがそうだとすると、きみは自分がいま何をしようとしているかわかっているかな？ それとも気づいていないのかな？」とぼくは言った。

「何のことですか？」

15 ソフィストは、保守的な人々にとっては胡散臭い存在であり、その社会的評価は、毀誉褒貶が相半ばしていた。ヒポクラテスの躊躇の背後には、こうした当時の状況がある。

16 読み書き、音楽（竖琴の演奏）、体育は、古代ギリシャにおける教養教育（パイデア）の三本柱であり、その目的は、専門的職業人の育成ではなく、人間として優れた国民（自由人）の育成にある。ソフィストの教育がこうした教養教育であるとしたら、ヒポクラテス自身がプロのソフィストになる必要はなくなる。

「きみは、きみがソフィストと呼ぶ人物に、きみ自身の心をゆだね、その世話をしてもらおうとしていることになるのだ。でも、ソフィストとはそもそも何なのか？もし、きみがそれを知っているなら、ぼくは大いに感心するだろう。だが、もしきみがそれを知らないなら、きみは自分が何に心をゆだねようとしているのかも、またそれがよいものなのか悪いものなのかも、知らないことになるのだよ」

「いや、知っているつもりですよ」と彼は言った。

「それなら、言ってほしい。きみは、ソフィストとは何だと考えているのかね？」

彼は言った。「ぼくの考えでは、ソフィストとは、その名が示すとおり、〈賢いことを知っている人〉のことです¹⁷」

ぼくは言った。「だがね、それなら画家や大工などにもいえることではないだろうか？ これらの人たちだって〈賢いことを知っている人〉たちなのだから。だが、誰かがぼくたちに『画家というのは、どんな賢いことを知っているのでしょうか？』と尋ねたでしょう。ぼくたちはこの人に『絵画の制作に関する賢いことです』と答えることになるだろう。これ以外の場合でも、同様のことがいえる。

さて、それでは、もし誰かが次のように尋ねたとしたらどうだろう？ 『それで、

ソフィストというのは、どんな賢いことを知っているのでしょうか?』とね。ぼくたちは、この人に何と答えたらよいだろうか? つまり、ソフィストとは、人を何にしてくれる達人なのだろうか?」

「ソフィストとは、人を弁舌巧みな者にしてくれる達人です。わたしたちには、他に答えようがありません、ソクラテス」

ぼくは言った。「おそらくは、それで正しいだろう。だが十分とはいえない。なぜなら、その答えから、次のような新たな疑問が生まれるからだ。すなわち、ソフィストが人を弁舌巧みな者にしてくれるといっても、それは何に関してなのか? たとえば、音楽の先生だって、たしかに人を弁舌巧みな者にしてくれる。でも、その範囲は、彼が知識を与えてくれる事柄、つまり音楽の話に限られている。そうだね?」

「そうです」

17 ヒポクラテスは、「ソフィステス (sophistes)」という名を、「ソフォン (sophon) ・エピステモン (epistemon)」(賢いことを・知っている人) の省略形と解釈している。

「では、ソフィストが人を弁舌巧みな者にしてくれるのは、いったい何に関してなのか？」

「もちろん、彼が知識を与えてくれる事柄に関してです」

「まあ、たしかにそうなんだが……。でも、それは一体何だろうか？　つまり、ソフィスト自身が知識を持っていて、その知識を弟子にも与えてくれる事柄とは？」

「降参です。もう何も言えません」と彼は言った。

*

そのあと、ぼくは次のように言った。

「さあ、どうだろう？　きみは、自分の心をどんな危険にさらそうとしているか、わかるかな？　たとえば、きみが自分の体を誰かに託さなければならぬが、そのとき、体がよくなるか悪くなるかについて、危険を冒さなければならぬとしよう。きみは、その人に体を託すべきか否かについて、いろいろと検討するだろう。そして、友だちや家族の助言を求めながら、何日も考え続けることだろう。」

ところが、きみが体よりも大切だと思っているもの、すなわち心についてはどうだ

ろう？ きみにかかわるすべてのことが成功するか失敗するかは、まさにこの心がよくなるか悪くなるかにかかっているんだよ。ところがそれについては、きみはお父さんにもお兄さんにも、われわれ仲間の誰にも相談しなかったのだ。この国を訪れたあの異国人に、きみの心を託すべきか否かについてね。それどころか、きみの話によれば、きみはゆうべその話を聞くと、夜も明けぬうちにやって来て、きみ自身を彼に託すべきか否かについて、議論することもなく、きみ自身と友だちのお金を使い果たす気である。是が非でもプロタゴラスに弟子入りすると、もう決めてしまったかのようにね。

ところが、きみの話によれば、きみは彼と面識もなければ、話をしたこともないというではないか。たしかにきみは、彼をソフィストという名で呼びはする。しかし、ソフィストとはそもそも何なのかを、きみが知らないことは明らかだ。きみはそんな人物にきみ自身を託そうとしているのだよ」

これを聞いて彼は言った。「あなたのお話を聞くと、ソクラテス、どうもそのようなです」

「ところで、ヒポクラテス。ソフィストとは、心を養うためのいろいろな品物を商

う、何か貿易商人とか小売商人¹⁹のようなものではないだろうか？　すくなくとも、ぼくには、何かそのようなものにみえるのだが」

「ソクラテス、心は何によって養われるのでしょうか？」

ぼくは言った。「もちろん、「学んで身につけられる」知識によってだよ。そして友よ、ソフィストがその商品をほめるときには、彼がぼくたちをだますことのないように気をつけようではないか。ちょうど、貿易商人や小売商人が、体を養う食物についてそうするようにね。というのも、彼らは、自分たちが売り歩く商品のうち、どれが体によくてどれが悪いかなど自分でも知りもしないのに、売りに出すときには、すべての商品をほめるのだ。しかも、彼らから買う側も、運動の指導者や医者でもない限りは、そのよし悪しがわからない。

それと同様に、諸国を行き来しながらいろいろな知識を売り歩く商人たちも、それらを売りに出して、欲しい人がやって来るたびに小売するとき、彼らが売りに出すすべての商品をほめる。だがね、いいかい、おそらく彼らのなかには、自分が売りに出す商品のうち、どれが心によくてどれが悪いかを知らない者もいることだろう。そして、彼らから買う側についても、まったく同じことがいえる。この場合、誰かが心

の医者でもない限りはね。

そういうわけで、もしきみが、それらの商品のうちで、どれがよくてどれが悪いのかを知っているのであれば、プロタゴラスから知識を買おうが、ほかの誰かから買うが、きみは安全だ。だがね、いいかい、もし知らないのであれば気をつけるのだ。いちばん大切なものを賭けて、危険な目にあわないように。

じつさい、食べ物を買うときよりも、知識を買うときのほうが、はるかに危険が大きいのだよ。というのも、小売商人や貿易商人から買った食べ物や飲み物は、「持参した」別の容器に入れて持ち帰ることができる。だから、飲んだり食べたりして体のなかに取り入れてしまうまえに、それらを家に置いておき、専門家を呼んできて相談することができるのだ。食べたり飲んだりしてもよいのはどれで、だめなのはどれか、またどのくらいの量を、どのようなときに、食べたり飲んだりすればよいかについてね。だから、こうしたものを買うときには、危険はそれほど大きくないわけだ。

18 貿易商人（エンポロス）とは、諸国を渡り歩いて商品を売買する人のこと。

19 小売商人（カペーロス）とは、国内の市場に店を構えて商品を売買する人のこと。

ところがこれに対して、知識は別の容器に入れて持ち帰ることができない。いったん代金を払うと、きみはその知識をただちに心のなかに取り入れて、学んでしまってから帰らねばならない。そしてそのとき、きみはすでに損害を受けているか、利益を手をしているかのいずれかなのだ。

だからぼくたちは、ぼくたちより年上の人たちも交えて、この問題を検討したほうがよいだろう。なぜなら、これほど大事なことを決めるには、ぼくたちはまだ若いのだから。でも、いまは当初の計画どおり、あの人のところに行つて話を聞くことにしよう。そして、話を聞いたあとで、ほかの人たちにも相談してみよう。じつさい、あそこにいるのはプロタゴラスひとりではない。エリス人のヒッピ阿斯²⁰もいるし、それにケオス島のプロディコス²¹もいると思う。また、その他にも、たくさん賢者たちがいるからね」

- 21 20
アテネに近いケオス島イウリス出身のソフィスト。数々の学問分野に精通する博覧強記のソフィストとして知られる。おそらく、ソクラテスと同世代と思われる。



プロタゴラス
——あるソフィストとの^{たいわ}対話

著者 プラトン
なかざわ つとむ
訳者 中澤 務

2010年12月20日 初版第1刷発行

発行者 駒井 稔
印刷 萩原印刷
製本 ナショナル製本

発行所 株式会社光文社
〒112-8011東京都文京区音羽1-16-6
電話 03 (5395) 8162 (編集部)
03 (5395) 8113 (書籍販売部)
03 (5395) 8125 (業務部)
www.kobunsha.com

©Tsutomu Nakazawa 2010
落丁本・乱丁本は業務部へご連絡くだされば、お取り替えいたします。
ISBN978-4-334-75221-7 Printed in Japan

Ⓡ本書の全部または一部を無断で複製複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複製を希望される場合は、日本複製権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。